精神科治療学　19(10)；1189-1195, 2004

特集―アスペルガー症候群―思春期以降の対応―Ⅱ

広汎性発達障害と創造性
―原初的知覚様態と原初的コミュニケーション―

小林　隆児*

抄録：広汎性発達障害（PDD）にしばしば認められる独自性と創造性について，PDDの障害の本質との関連性において検討した。本来，われわれの日常に存在する事象や対象はいうに及ばず，われわれ自身の体験世界どれ一つとっても同一なものはない。その意味でそれらはすべて私的体験版といえる。通常われわれは認識という精神機能によって，それらをある面から切り取ってことばで表現する術を身につける。このことによって，本来私的体験版であった独自の体験は共通体験版になっていく。しかし，この過程は体験そのものの独自性を失わせる危険性をもはらんでいる。PDDに特異な創造性を発見するのは，彼らが言語認知機能の獲得過程に深刻な問題をはらんでいるために，自らの体験世界を容易に共通体験版にしがたいことと深く関係している。彼らは加齢を経ても原初的知覚様態優位な原初的コミュニケーションの世界に依拠しているが，それは感性に強く依存した世界であるため，感性が直接的に表現されやすいのであろう。ただここで重要なことは，彼らが志向する共同性を保証する援助をわれわれが行うことによって初めて，彼らも自己を表現し，他者との共感的理解を体験する道が拓けるということである。

精神科治療学　19(10)；1189-1195, 2004

Key words：*creativity, metaphor, pervasive developmental disorder, primitive communication, primitive perception*

はじめに

編集委員会から依頼されたテーマには副題として「自身の内界を記述した例」とあった。おそらく委員会の期待には，アスペルガー症候群（AS）の青年の中で，自分を語り，かつ創造的な才能をもつ事例を取り上げながら，彼らの創造性が何に起因しているかについて論じてほしいということではないかと推察した。しかし，残念ながらそれにふさわしく，かつ具体的に記述することが可能な事例を現在筆者は手元に有していない。

そこで，本論ではASに限らず，広汎性発達障害（PDD）において，創造的な才能を持つ例が少なからずあることと，その障害の本質との関係について，私見を述べることで依頼された責務に応えようと思う。

新しいものを作り出すという創造性が，PDDにおいて独特な形で認められることはKanner[2]の記述以来，常に注目されてきた。瞬時のうちに微細な構造を正確無比に描いたり，一度聞いた音

Pervasive developmental disorders and creativity: Primitive perception and primitive communication.
*東海大学健康科学部社会福祉学科
〔〒259-1193　神奈川県伊勢原市望星台〕
Ryuji Kobayashi, M.D., Ph.D.: Faculty of Social Work, Tokai University School of Health Sciences, Bohseidai, Isehara-shi, Kanagawa, 259-1193 Japan.

楽を正確に楽器を用いて再現するといった，特異な記憶に基づくものもあれば，独特な感性を描画や音楽などを通して表現するものなどがよく見聞する例である。

たしかにそのような独特な形で表現された作品を目にすると，われわれはその独自な視点や感性に少なからず感動を覚えるが，それらはPDDとされる障害の本質とどのような関連性があるのであろうか。俗に，「天才と狂気は紙一重」と言われてきたように，ある特殊な才能とこころの問題はどこかで深く関連し合っていることは経験的によく知られている。では，PDDと創造性とはどのような関係にあるのであろうか。

事象や対象の独自性と共通性

われわれが日々体験していること自体，同じ自分が体験したものであったとしても，何一つ同じものはなく，常に日々新たな体験である。毎日習慣化されていることであっても，厳密に見ていくと各々の体験は似て非なるものである。

同じように，われわれの身の回りに存在する様々な対象においても，たとえば「すいか」一つとっても，スーパーの店頭に並んでいる「すいか」一つ一つはすべて色，形，重さなどは異なり，どれ一つとして同じ「すいか」はない。

このようにわれわれの日常世界における事象や対象には，どれ一つとして同一なものは存在せず，各々独自性をもつ。しかし，われわれはそれらの中から何らかの共通性（属性）を取り出して，たとえばそれを「すいか」などと称している。このように似通った事象や対象の共通した一面を取り出して，ことばで表現している。このような精神的営みは「抽象化」あるいは「象徴化」と言われるものである。このことによって，われわれは（知覚）体験世界を他者と共有することが可能になり，コミュニケーションも可能になる。もしもそのような営みが困難であれば，われわれの各々の（知覚）体験世界は永遠に他者と共有されることなく，独自の世界で生き続けるしか術がなくなってくる。

未分節な体験世界と ことばによる分節化

このように，われわれが個人的に体験する世界は，本来一回性で，独自性をもち，再現は不可能である。しかし，われわれは自分固有な体験であっても，他者と共通な一面を取り出し，「ことば」によって切り分けて記憶することができる。その結果，われわれは自らの体験を他者と理解し合うことが可能になる。本来，体験世界は未分節で独自性の強いものであるが，ことばによって体験世界を切り分けることにより，他者との共有世界を持つことが可能になる。このようにして，未分節な体験世界はことばによる分節化を通して，共同性を有することになる。

私的体験版と共通体験版

以上のことから，体験世界そのものは本来私的体験版ということができるが，「ことば」で表現されることによって共通体験版となる。

本稿のテーマである創造性について考える時，この私的体験版こそ創造性の起源であることはすぐに気づかされるが，ここで重要なことは，唯一無二性という性質をもつ私的体験版が「ことば」によって一般化され，共通体験版となっていく過程で，その唯一無二性が次第に薄らぎ，消退していく危険性をはらんでいることである。「ことば」を獲得することが，諸刃の剣とも言われるゆえんである。「ことば」を獲得することが，共通認識を可能にする一方で，事象や対象の多様な側面を，一面的で常識的な捉え方で固定的に切り分けてしまうという危険性をもはらんでいるのである。

生活体験にみられる独特な着眼点

〔事例〕A男，1歳8ヵ月（文献6のp.65-69）

まだ発語はなく，歩くことができない。精神運動発達の遅れをともなった自閉症児である。

彼は治療室で床にころがっているたくさんのボールを手で扱い，ボールが動く様を見つめながら追いかけることに夢中である。周囲の大人の存在にはまったくといっていいほど関心を示さない。

動きが止まった時に母親が頬ずりしようと近寄ると，顔を背けて母親に背中を向けてしまい，ふたたびボールに夢中になって動き回っている。

治療が始まってしばらくは，そんな自閉的行動が目立っていたが，少しずつ周囲の大人の存在に関心を向けてくるようになった頃である。女性治療者が彼から背を向けて床にすわっていると，おもむろに背中を彼女に向けながら，後ずさりするようにして近づいてきた。こちらに関心を向けて相手をしてもらいたいのかなと気づいた彼女は，すぐに方向を変えて彼の前まで回って相手をしようと移動した。すると，彼はすぐさま反対方向に回転して彼女に背を向けてしまった。

このようにA男は対人接近に対して強いアンビバレンスを示していた。そのため一緒に何かで遊ぶことも容易ではなかった。

治療開始直後のあるセッションで，A男は，はいはいしながら治療室に置いてあった「パンチング・ドール（起きあがり小坊師）」のそばに寄っていった。そばで付き合っていた母親は相手をしようとしてそれを思わず手で何度か押して左右に揺らした。するとA男はひどく怒り，手でそれを押さえてじっと「パンチングドール」の裏面を眺めていた。そこには注意書きの文字とマークが記されていたが，A男はそれに見入っていたのである。

PDDにおいて顕著に認められる障害は，単に対人関係障害として表面化するのみでなく，彼らが環境世界を捉える際にも，その独自性が際立ってくる。われわれは事象や対象を前にした時，暗黙のうちに獲得したある枠組みで捉えている。そのようにしてわれわれは環境世界を共同性のあるものとして捉え，共同生活を営んでいる。しかし，PDDでは本来暗黙のうちに獲得された枠組みで環境世界を捉えるということが困難であるために，A男に示されたように事象や対象を彼ら独特な視点のもとに捉えている。このことは彼らの体験世界がわれわれのそれとは大きく異なった独自性の際立ったものであることを推測させる。

独自性の強い世界と共同世界

しかし，ここで問題としなければならないのは，単にこのような極度に独自性の強い世界に生きていることが，創造性を生み出すことに直結しないということである。独特な着眼点や感性を大切にする一方で，われわれとの共同世界をも志向する営みが平行して行われて初めて，彼らも生きる喜びを体現し，世界を輝きのあるものとして捉えることができるようになり，その表現形態がわれわれに感動をもたらすものとなっていくように思われる。

では，彼らの感性がどのようにして共同性を帯びていくかを考えてみよう。以下に示す事例は筆者らの関係発達臨床の場であるMother-Infant Unit（MIU）[5]で経験したものである。

多様な対象にはらまれた共通の性質
—原初的知覚様態としてのvitality affects—

〔事例〕寛太，自閉症，中等度精神遅滞水準，関係支援開始時3歳3ヵ月

寛太母子への関係支援開始から2年近く経過した頃，母親と一緒にいろいろな体験を積む中で，母親が発するせりふを独特な仕方によって自分でも使うようになってきた頃のあるエピソードである（文献5のp.120-122）。

＜寛太の母親日記より＞

いまだことばにはほど遠いが，要求の声，質問の声，痛い，かゆいなど，意味のある声が多く出る。絵本を見ながら，尖っている葉を指さして「イタイ，イタイ」と言う。この頃，このフレーズをよく使って，尖った所やペンキが禿げている所も指さして，「イタイ，イタイ」と教えにくる。

母親はこのエピソードを回顧して，数年後以下のように語っている[1]。

＜寛太の母親の回想＞

5歳になって，初めて花火を不思議な光として見つめていた時，不運にも小さい火傷を負ってしまった。その痛みを癒すのに，寛太が初めて私に抱かれに来てくれた。MIUでの関係支援開始から半年程して，寛太が物にぶつかるなどすると「ぶつけて，痛かった」と報告に来てくれるよう

にはなっていたが，高熱に苦しんでいる時や本当に辛い時はまだじっと一人で耐えて私を寄せ付けてはくれなかったので，意外な気がした。寛太は私に痛い指を見せて訴えた後，しばらくしてシクシクと泣き出し，次第に「エーン，エーン」と大泣きになった。寛太には申し訳ないが，初めて本当に痛い時に来てくれたのが嬉しい気持ちで，寛太を抱いて背中をさすりながら体をゆらしていたら，泣き声が少しずつ小さくなってきてその内にスッと眠ってしまったのである。時間にして30分くらいの私の幸せな気持ち，寛太も私の胸で痛みからだんだんと幸せな気持ちになってそのまま眠ってくれていたら嬉しい。

その後，自分の怪我の痛く甘い経験からだろうか，木の皮がめくれていたり，ペンキがはげているのを見つけて「イタイ，イタイ」と指を指して教えてくれる。絵本でお城が後光をさしてピカピカと描かれていると，その尖った先端をさして「イタイ，イタイ」と言う。そのどれもが泣き顔と甘えた声をつくっているところがかわいらしい。こんな時は，あの初めて火傷を負った夜の痛くて幸せな気持ちと似ているのだろうか。

道端に櫛のように横一列に並べられた石を見て「は（歯）」。見るとおかしくなるくらい歯そっくりに四角い石が並んでいる。そんな寛太の世界に触れていると，私も幼い頃にお風呂場の天井にできた染みの中から「きりん」の形を見つけたり，寛太のように木の葉の生い茂った輪郭から当時大好きだったいろいろな動物を探し出すのにずいぶん時間を費やしていたことを思い出す。私は動物で寛太は地図という違いだけで，同じ遊びを一人心の中で楽しんでいたのである。大人になって忘れてしまった，飽きることがない遊びのひとつである。

怪我をした際の痛みの体験と，木の皮がめくれた箇所，ペンキがはげている箇所，お城が後光をさしてピカピカ描かれている様などが寛太の世界にあってはある共通な性質を感じさせたのであろう。それが彼の＜イタイ，イタイ＞という表現に示されている。これらの対象は一見すると多様であるが，すべての対象に共通する形を発見することができる。このような対象の形や動きを敏感に感じ取ることを可能にしているのがvitality affects[8]，すなわち原初的知覚様態とされるものである。自分が過去に知覚した痛みのvitality affectsと同質のものをそこに感じ取ったからこそ，＜イタイ＞と思わず表現している。寛太にとってそのような形を同じような生命感あふれる情動で知覚している。さらには，このように寛太を表現に駆り立てているのは，そのように感じ取ったものを母親と共有したいという関係欲求（甘え）の高まりであるということである。

多様な対象に感じ取るvitality affectsと力動性の輪郭

先にも述べたように，様々な異なった対象のもつ属性の中で共通のものを見い出し，それを何らかの媒体によって表現する働きを象徴化，抽象化と称していることを考えると，その原型としての体験様式をここに見い出すことができる。Vitality affectsによって知覚された対象の形態のもつゲシュタルト性と，心地よさを伴った痛みのもつゲシュタルト性，さらにはそこで発せられた＜イタイ＞という発語のもつゲシュタルト性，各々すべてにわたって共通した特徴がある。それは，音声のvitality affectsが有する動きの輪郭と対象の形態のもつ輪郭，そして音声のもつ音の調子の輪郭いずれにおいても認められる，共通した力動性（活動性）の輪郭activation contour[8]である。

原初的知覚様態と原初的コミュニケーション

このような独特な知覚様態は，けっしてPDDに特異な現象ではないが，PDDにおいてはいつまでも言語認知機能の獲得に困難さを有するがゆえに，加齢を経ても原初的知覚様態が活発に働いている[4,9]。PDDは原初的知覚様態の働きによって機能しているともいえる原初的コミュニケーション（情動的コミュニケーション）の世界に強く依存して環境世界と関わり続けていることを考えると，感性がいつまでも鋭敏に働いているということになる。このことが彼らの独特な創造性を可能にしている大きな根拠のひとつともいえるであ

ろう。

隠喩的構造をもつ自閉症のことば

自閉症にみられることばの特徴の一つとしてよく知られているのが隠喩的表現[5]である。この現象は，彼らが一見何かを喩えているように見えても，本人は意識してそれを用いているのではなく，意識の介在しない過程によって行われている表現活動であるところに大きな特徴がある[6]。

〔事例〕G男，自閉症，最重度精神遅滞水準，青年期，施設入所中（文献6のp.170-175および文献7より引用）

施設に入所当初は，激しいこだわり行動，自傷，他害，パニックなどを呈し，強度行動障害と診断されている。

入所時の状態：不安・緊張が非常に強く，他者の言動に対してことごとくそれを被害的，迫害的に感じ取り，自傷や他害が誘発されやすい。過去の不快な体験がさかんに想起されるのか，タイム・スリップ現象が目立ち，彼の行動には強い強迫性が感じられる。彼と関わる際には，指導員も何をされるかわからないという不安をいつも感じて緊張しやすい。

入所後の援助経過：G男は入所時から不安・緊張が強く，他者の言動に対してとても被害的，迫害的に感じやすい傾向が顕著だった。指導員から褒められても，禁止のことばをかけられても，自分の草を噛むという自傷を始め，施設内に響き渡るほどの大きな声で，「オ姉チャンクルヨ～」「オ姉チャントコ（お姉ちゃんのところに）イク～」「モウ　ゴマオサツ　シマットイテ～」「×××チャンチ（×××ちゃんの家に）イッチャダメネ」「人ノホッペサワッチャダメナノ～」など，指導員にはとてもわかりにくいせりふを叫びながら歩き回っていた。その発声はほとんど絶叫調で，思わず耳を塞ぎたくなるほどであった。しかし，彼は指導員の神経を逆なでするかのように，毎日そのようなせりふを執拗に繰り返していた。時にはわざわざ指導員の目の前に来て，唾を飛ばしながら叫んでいた。その表情は苦痛に歪み，切迫感に満ちて，とても悲しそうに見えた。必死に何かを訴えてきてはいるが，彼のことばの意味を考えてもさっぱりわからないことが多かったのである。こちらが「そう，お姉ちゃん来るの」とか，「ごまおさつって何？」などと尋ねると，とても嫌な顔をして目の前から立ち去っていくのだった。あまりのうるささに「静かにしてね」などと言おうものなら，さらに大きい声を出し，その後しばらくその指導員の顔を見ただけで自傷を繰り返していた。

彼の独特な表現に困惑しながらも，指導員は彼とのコミュニケーションがどのような時にうまくいくかいかないかを試行錯誤の中で確かめるうちに，彼のせりふには彼固有の歴史が反映していることがわかってきた。彼が小さい頃から，姉は自分が困った時に助けてくれるという頼れる存在だったのである。そのため彼が何かに困った時には＜オ姉チャン＞というせりふを発するのだろうと推測できるようになった。

＜ゴマオサツ＞という表現は，とても機嫌の悪いときにだけ使われていたが，実はこの「ごまおさつ」は冷凍食品の名前であった。彼が養護学校の高等部でずっと登校拒否をしていた時，担任が毎日彼を迎えにきていたという。その際，彼は必ずこの「ごまおさつ」を一つトースターで温めて食べてからしぶしぶ出かけて行っていたというのである。その時の気持ちと似たような感情が沸いてきたときに，どうやらこの「ごまおさつ」という表現を使うことがわかってきたのである。

このような彼のことばの背景にある歴史を推測できるようになると，次第に指導員に心のゆとりが生まれた。彼の切迫したせりふが発せられても，せりふの字面の意味にはとらわれず，どんな時に，どんな表情で，どのような気持ちで言っているのかを念頭に置いて受け止めることを常に心がけるようになった。

すると＜オ姉チャン＞ということばが出た時には，何か困ったことが起こった時が多く，＜ゴマオサツ＞が出てきた時は何か嫌なことがあった時，というようにそのことばが出てきた時の彼の気持ちが少しずつわかるようになり，彼が何か訴えてきた時に，「ごまおさつだねー」とは言い返さずに，「そう，何か嫌なことがあったね～」と

われわれが通常用いることばで彼の気持ちを表現し直して，彼の口調を真似ながら返していった。すると，彼はパッと表情を輝かせ，＜(嫌なことが) アッタネ～＞と言い，それまで大騒ぎしていたのが嘘のように静かになることが増えていった。

＜ゴマオサツ＞と隠喩的表現

施設内でG男が頻回に発していた＜ゴマオサツ＞ということばは，養護学校高等部時代，担任が家庭に自分を迎えに来たために学校に行かされた時の嫌な情動体験と類似の情動体験を意味して発せられている。つまり，彼のことば＜ゴマオサツ＞の真意は，＜ゴマオサツ＞を食べてから学校に嫌々行かされた時のように，今の自分は嫌な気持ちだということである。このような表現は隠喩的表現というにふさわしいものであるが，G男自身はそのような意図で用いているのではないことは確かである。このように，PDDにみられることばには隠喩的構造をもつことは少なくない。

隠喩と私的体験版

G男は嫌々ながら学校に行かされた時の気持ちをこのように表現しているが，この表現内容はG男のみの唯一無二の体験で，私的体験版といえるものである。このように自閉症にみられることばの意味は，その歴史性を含んだ文脈に強く規定されているため，多くの人には理解しがたいものがあるが，彼らと生活をともにし，彼らの生活史の背景を深く理解した時に初めて彼らの独特な表現の意味が理解できる。その点では相互理解が可能になった時には大きな感動すら覚える。それは本人自身の作為的，意図的な営みでないがゆえに，より一層感動的なものとなる。

〔事例〕I男，自閉症，5歳2ヵ月（文献6のp.140-142）

MIUでの関係支援開始後，22ヵ月ほど経過した頃のことである。最初の頃に比してはるかに母親との関係は安定し，抵抗なく母親に甘えるようになっていた。この頃には母親の語りかけることばをさかんに取り入れるようになってきていた。そんなある日のことであった。

母子一緒に外を歩いている時に，台風一過でその日はかなり暑かった。歩いていると，ふとI男が「サムイ（寒い)」と言った。母親はこの数日と比べても暑いと感じていたので，思わず「暑いよね」と言い直して応答した。すると，またI男は「サムイ」と同じように繰り返した。そこで母親はなぜ彼は「サムイ」と言ったのだろうかと考えた。まもなく，I男はビルの日陰に入った時に「サムイ」と言っていることに気づき，なるほどと感心したという。

子どもの体験世界と養育者の体験世界

ここに示されたエピソードもとても感動的である。I男は微妙な体感温度の変化を敏感にとらえ，すぐさまそれをことばで表現して母親に伝えている。その日は確かに暑かったが，ビルの日陰に入るとひんやりとした涼しさを感じさせ，そのような微妙な気温の変化を敏感に感じ取ったI男は，その体験を＜サムイ＞と表現したのである。

このような両者の体験に大きな違いが起こっているのは，体験世界を意味づけする背景としての文脈の相違に起因しているということもできる。I男にとっては微妙な体感温度の変化，散歩時の周囲の風景の変化など身近な風景がこのような＜知覚-情動＞体験の背景にあったが，母親においてはこの数日の天候の変化という大きな時間軸を含めた文脈が背景にあったのである。このように，体験や対象のもつ意味は当事者の体験世界における文脈に強く規定されるということがわかるが，I男の体験世界がいかに繊細な＜知覚-情動＞体験に根ざしているかを教えてくれる貴重なエピソードである。

おわりに

PDDに独自な世界と豊かな創造性を発見することは少なくないが，それを彼らの特殊な才能のためであると矮小化してはならない。原初的知覚様態がいつまでも活発に機能していることや対象や事象を独自な視点で捉えていることは，PDDの障害の本質と深く関連している。したがって，われわれは彼らの独自性や創造性にのみ心を奪わ

れるのではなく，彼らが内面で抱いている共同性の志向（関係欲求）を保証し，支援していくことによって，初めて彼らも自己を積極的に表現していく勇気をもつのであろう。その結果生まれる彼らとわれわれとの共感の世界が，大きな感動を呼ぶのである。そのようにして，彼らに内在する創造性が開花して初めて，彼らも生きる喜びを実感するのではないかと思う。

なお，本特集テーマがASであることを考えると，ASと創造性に絞って論じる必要があったが，PDD全体を視野に据えることによってその本質を捉えやすくなるのではないかと考え，あえて本論の表題のように変更した。読者の寛容を乞う次第である。

文　献

1) 井上理枝：子どもと母親の育ち合い．第2回自閉症の関係発達臨床セミナー講義録，p.79-92，関係発達と臨床を考える会，2003. 08. 19.
2) Kanner, L.: Autistic disturbances of affective contact. Nervous Child, 2; 217-250, 1943.
3) Kanner, L.: Irrelevant and metaphorical language in early infantile autism. Am. J. Psychiatry, 103; 242-246, 1946.
4) 小林隆児：自閉症の発達精神病理と治療．岩崎学術出版社，東京，1999.
5) 小林隆児：自閉症の関係障害臨床―母と子のあいだを治療する―．ミネルヴァ書房，京都，2000.
6) 小林隆児：自閉症とことばの成り立ち―関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界―．ミネルヴァ書房，京都，2004.
7) 斉藤理歩：日々積み重ねていくもの．第3回自閉症の関係発達臨床セミナー講義録，p.91-101，関係発達と臨床を考える会，2004. 08. 19.
8) Stern, D.: The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology. Basic Books, New York, 1985.（小此木啓吾，丸田俊彦監訳，神庭靖子，神庭重信訳：乳児の対人世界―理論編/臨床編．岩崎学術出版社，東京，1989/1991.）
9) Werner, H.: Comparative Psychology of Mental Development. International University Press, New York, 1948.（鯨岡峻，浜田寿美男訳：発達心理学入門．ミネルヴァ書房，京都，1976.）